

### 第3回 国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会 議事録

日時：令和5年1月29日（日） 14:00～16:30

場所：仙台市役所二日町第五仮庁舎 10階ホール

#### ○司会

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第3回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を開催いたします。

私は、本日の進行を務めますまちづくり政策局防災環境都市推進室の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

初めに、資料の確認でございます。

本日の資料は、座席表と本日の次第、資料1から7となっております。資料の不足がございましたらお申しつけください。

本日、川内委員につきましては、オンラインでの参加となっております。

なお、港委員、渡邊委員から欠席のご連絡をいただいております。

会の成立に関してご報告いたします。本日は8名の委員にご出席いただいておりますことから、要綱第4条第2項に規定する定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

次に、本懇話会の運営について確認をさせていただきます。

本日の議事録についてですが、事務局が作成した議事録の案について、今野委員、佐藤委員のお二人にご確認、ご署名をいただきたいと存じますが、両委員、よろしいでしょうか。

（「はい」の声あり）

#### ○司会

ありがとうございます。

その他運営に関することで、皆様から何かご意見はございますか。

（発言の声なし）

#### ○司会

それでは、ただいまより本日の議事に入ります。

これからの進行につきましては、市長にお願いいたします。

#### ○郡市長

皆様、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

冒頭になりますけれども、前回、急遽欠席ということでご迷惑をおかけいたしました。本日は、音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点の施設整備について、前回積み残しとなった青葉山エリアに立地する施設としての役割について、この2点を中心にご議論いただくことになっております。

初めに、前回の懇話会の振り返りをさせていただきますけれども、本当にいいお話が出たというふうに報告を受けております。複合施設整備での具体的な事業、どのような事業像がいいのか、あるいは基本的な理念に関して大変多くのご意見をいただいたというふうに報告を受けているところでございます。当日の主なご意見につきましては、

資料1にまとめているということですので、後ほどご高覧をいただければと思います。

続きまして、前回の懇話会からこれまでの間に本市において実施いたしました市民意見の聞き取り、それから関係者へのヒアリング状況、また、先日からパブリックコメントを開始している「仙台・青葉山エリア文化観光交流ビジョン」の中間案について、担当からご説明させていただきます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料2-1をご覧ください。

初めに、市民意見の紹介でございます。

複合施設の整備検討に併せまして、昨年8月より市民の皆様からホームページ上で意見を募集しているところございまして、1月20日時点で累計55件のお声を頂戴いたしました。また、本市の広聴制度でございます「市民の声」にもお声が寄せられておりまして、いただいたお声の詳細につきましては、資料2-1別紙におまとめをしておりますので、こちらは後ほどご高覧いただければと存じます。

次に、2、文化団体等へのヒアリング結果についてでございます。

今回整備いたします音楽ホールでは、社会包摂の視点からの取組も行っていきたいと考えているところございまして、複合施設に求めることや重視すべき視点などにつきまして、障害者の文化芸術活動支援などを行われておりますNPO法人の皆様を中心にヒアリングを実施いたしました。いただいた主なご意見を紹介いたしますと、「仙台は、新たなものが生まれる土壌があるので、仙台ならではの施設にしなければもったいない」といったご意見や、「文化芸術による社会包摂活動はパフォーマンスアーツが主で、クラシックとのつながりが薄いため、地方オーケストラなどが参画するようなことが仙台で実現されれば意義が大きいのではないか」といったご意見、また、ハード面ということになりますと、下のほうになりますと、大ホールや小ホール、ワークショップルームなどに関しまして望ましい在り方についてご意見をいただいたところでございます。

また、資料の裏面になりますと、運営面という観点からは、施設の利用の仕方や企画などについて相談に乗ってくれるようなものが理想であるといったようなお声も頂戴したところでございます。

○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

続きまして、裏面3、震災伝承関係者へのヒアリングについてご報告をいたします。

今回の対象でございますけれども、東北大学災害科学国際研究所の皆様、せんだいメディアテーク元副館長で前回の中心部震災メモリアル検討委員会の委員でございました佐藤泰美さんにヒアリングを行いました。

主なご意見として、懇話会でも、縷々、委員の皆様からもご指摘をいただいております「専門的な人材の確保が重要であろう」というところ、「『仙台防災枠組』の採択地であり防災・減災の世界最新地である仙台市の名に恥じぬ施設となるよう十分な体制を組んでいただきたい」というところ、それから、「災害文化につきましては、根づき、定着することが社会のレジリエンスの向上にとって重要である」というところ、その下、「文明災とすら言える震災の経験から得られる大きな気づきや普遍的な課題についてこの拠点が正面から向き合ってほしい」。さらには、「文化芸術と災害文化の強力なシナジー効果というのをさらに打ち出してほしい」、最後でございますけれども、

「人類の未来のための災害文化について考える場、そしてそれを世界に発信できるような大事業を興していくような拠点をつくり上げてほしい」といったご意見を頂戴しているところでございます。

○事務局（市川交流企画課長）

続きまして、資料2-2をご覧ください。

仙台・青葉山エリア文化観光交流ビジョンの中間案でございます。委員の皆様には、机上に全体版もお渡ししておりますけれども、本日は、こちら、2-2の概要版によりご説明申し上げます。

本中間案は、これまで計3回の有識者懇話会を開催いたしましてまとめたものでございます。現在、パブリックコメントを実施しております、寄せられた意見などを踏まえ、3月に最後の懇話会を開催し、今年度内に策定することとしております。

内容について、かいつまんでご説明申し上げます。

お開きいただきまして、1ページ目、第1章、青葉山エリアです。1のビジョンの策定につきましては、様々な資源が集積するこのエリアにおいてさらに重要なプロジェクトが進行するこの機会に改めてエリアの将来像などを示し、交流人口の一層の拡大につなげていくというものです。

その下、2の青葉山エリアの範囲ですが、エリアの数々の資源に加えまして、音楽ホール、中心部震災メモリアル拠点の整備など様々なプロジェクトが進むこの一帯を青葉山エリアとしております。下の地図の薄緑色をかけているところが今回対象といたしますエリアの範囲でございまして、このうちの仙台城跡や天然記念物の指定地というのも併せてお示ししております。

続いて、2ページ、第2章、青葉山エリアの現状等でございます。

青葉山エリアの特性と価値について記載しております、豊かな自然と歴史が残る特別なエリアであることや、文化芸術、教育・研究施設が集積するエリアであることなど、大きく6点を掲げてございます。

次に、3ページです。第3章、青葉山エリアの基本的方向性についてでございます。このビジョンの中心となる部分でありまして、エリアのコンセプトや目指す将来像などについてまとめております。エリアのコンセプトは、「杜の都の「歴史」と「今」と「未来」をつなぐ～特別な空間と時間を青葉山エリアで～」といたしました。その上に記載の4つの考え方に基づきまとめたものでございます。

次に、4ページ、目指すエリアの将来像とその実現に向けた取組の方向性についてです。将来像は、資料にありますとおり4点掲げ、これらの実現に向けて、それぞれの右側に取組の方向性を記載しております。

次に、5ページをご覧ください。

先ほどの将来像の実現により、にぎわいや新たな文化を創造するエリアとしていくためには、回遊性の向上が重要となります。エリア内における回遊性の向上はもとより、都心部とのつながりや人の流れを意識した都心との回遊性の向上を図ることで、都市全体の魅力や活力の向上につなげていくことは重要であるという考えの下、それぞれの取組の方向性についてまとめております。

6ページから9ページにかけては、第4章、青葉山エリアの将来といたしまして、

このエリアでは、多様な資源の下、様々な方が様々な楽しみ方や過ごし方ができると、そうした例をイメージ図で表現したものでございます。本ビジョンをご覧になった方が、青葉山エリアの将来の姿を想像していただけるようまとめたものでございます。

最後に、10ページでございますが、このビジョンの実現に向けまして、ビジョンの共有、本市における推進体制、エリアの関係機関や団体等との連携、この3点を記載しております。

中間案の説明については、以上でございます。

○郡市長

ただいま、市民意見の聞き取り、また、関係者の方々へのヒアリングの状況について説明があったところでございます。この件につきまして、皆様方から何かご意見、そしてご質問などがあればお出しいただきたいと存じますが、いかがでしょうか。

(発言の声なし)

○郡市長

よろしいですか。

では、先に進ませていただくことにいたします。

いよいよ意見交換ということで、初めに、本懇話会の今後の進め方について、事務方からまず説明をさせていただきます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料3をご覧ください。

今後の懇話会の概要についてでございます。これまでは、どちらかといいますと、理念的なお話を中心に伺ってまいりましたが、今回からは施設のハード面につきましてもご意見を伺ってまいります。本日は、音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点それぞれの施設の事業や必要な面積をお示しいたします。本日いただいたご意見を基に、4回目の懇話会の際に、複合施設としての事業や全体の面積、規模感などをお示ししたいと考えております。

また、4回目では、管理運営手法や整備手法、スケジュールなどにつきましてもご意見を伺ってまいりたいと考えているところでございます。その後、第5回懇話会では中間案、第6回懇話会では最終案という流れで考えているところでございます。

資料3につきましては、以上でございます。

○郡市長

ただいまのこれからの進め方について、何かご意見、ご質問ありますか。こうしたほうがよかろうというようなご意見があれば、ぜひお出しいただきたいと思うのですけれども、いかがですか。

(遠藤委員より挙手)

○郡市長

では、遠藤委員、お願いいたします。

○遠藤委員

今日は、どうぞよろしくお願ひいたします。

第4回の懇話会の予定の中には、管理運営手法ですとか、整備手法、整備スケジュールと入っているんですが、大分、第4回からハード的な、少し具体的なところが着々と

皆さんとお話できると思っていました。私の心配や期待の中では、震災メモリアルに関わらせてきていただいている、震災メモリアルは、どちらかというハードというよりは、どんな活動を、忘却から逃れて創造的に、マンネリ化せずにやっていくかということがとても重要だと思っています。ですので、基本コンセプトが出た後の、どういった活動や事業を、メモリアルも、文化芸術も一緒に協働しながら本当にすばらしいものを仙台、日本のみならず世界に発信していけるかということを考えると、もう少しそういうことを考える時間が欲しいなと思いました。

多分、市民やほかの皆さんもやはりどんな施設ができるのかと、ハード面にどうしても視点がいきますし、ハード面はとても大事なんですけども、もうちょっと、この施設が完成するのが仮に10年後ぐらいだとすると、10年間で実践と価値を高めていってオープンにしないといけないと思うんですけども、どう高めるかとか、10年間をどういうふうに進んでいくか、何をどう検討するかみたいなことも少し、今回の懇話会の中でも皆さんとお話をして、ハード面だけの提言、ビジョンとハード面だけに限らずに、10年間ちゃんと蓄積して、建物ができる前からしっかりと日本や世界に発信できるということをしっかりステップとして踏んでいけるようなことが懇話会の提言の中にも入るといいのかなと思いました。なので、そういったことを研究したり考えられたりするようなものもちょっと入れていただけるといいのかなと思いました。

それを考えると、第4回懇話会で結構具体的にだんだん出てきますので、その前後とかで話したりする機会を持つのがいいのか、でも、1回増やしてくれというのも私からも言えないので、どうしたらいいのかは私も分かりませんが、そういった事業面、ソフト面の国内、海外に向けて発信をするためにも、そこを皆さんと議論するような、そういうことが必要ではないかなと思いました。

○郡市長

今、遠藤委員から重要なお指摘があったかと思います。ほかの委員の皆様方も思っておられる方はおいでじゃないかと思いますが。

(本江委員より挙手)

○郡市長

本江先生、どうぞよろしく申し上げます。

○本江委員

今、遠藤さんが言われたことと近いことなんですけれども、今日も含めて今までの3回の懇話会ですと、やはり事務局で資料をご用意いただいて、ここで聞いて、いろいろな意見を言って終わると。ちょっと形式的な進め方にどうしてもならざるを得ないんですが、せっかくこうした経験を持った実践的なメンバーで懇話会をつくっているの、特に複合するということ、これは新しいタイプの施設を考えるということなので、ある種の発明ともっとたくさんのアイデアが必要だと思うんです。

なので、このフォーマルな会議はプロセスとして必要なだけけれども、こういう言い方をあえてしますが、音楽ホール側とメモリアル側に委員も分かれていて、「それぞれの意見を寄せて、併記して承認する」みたいなプロセスだけだと、不十分かなと思うところがあります。なので、皆さんいらっしゃっているの、タイミングや、会としてオーソライズする立てつけとかは分かりませんが、一つのテーブルに着いて、こういう合

築ができて、協働事業ができるんだったらこんなことができるのではないか、あるいはこういうこともやるべきではないかというようなことをフラットに一つのテーブルで話して、複合することのメリットってこれだけつくり出せるんだねということをもうちよっと率直に話す会ができるといいんじゃないかなと思います。

これもまた遠藤委員と同じで、1回仕事を増やす提案なので、形の工夫は要ると思いますが、都合がつく方だけでも、何かそういうブレーストーミングをやる、あるいはワークショップをしながら、こんなこともできるというのを、それぞれの案を出してきて並べるだけじゃない、一緒にこういうことをやるといいねというのを考える場を用意するのが、できれば4回目の前がいいと思いますけれども、やるといいのじゃないかなと思っております。

これに先立つ中心部震災メモリアル拠点検討委員会も、毎回資料を確認する会というよりは、集まったメンバーでアイデアを出し合うワークショップみたいに進めていくという形を、ちょっと変則的だったけれどもやってきて、市役所の皆さんもついてきて、やってくださっていたということもあり、その経験から、僕は大丈夫だと思うので、何かそうした会をやるのはどうかなというふうに思っておりました。今日のお話を聞いてからということでもありますが、何かそんなのをやるといいかなと思っております。

すみません、委員の皆さんには勝手に仕事を増やすお話ですけれども、お付き合いいただけるとありがたいと思っております。

○郡市長

ありがとうございます。

本江委員からも、遠藤委員のご意見を補強する形でお話をいただきました。重要な視点だろうと思います。

3回目の今日、それぞれの施設整備の方向性、大体の形が出てくるところではありませんけれども、そこにどのような魂を込めていくのかという点については、ご指摘のように、もう少し踏み込んだところも必要かもしれません。もう少し時間をつくる必要があろうなと私も思ったところです。

○金子文化観光局長

お二人の委員から大変重要なお話いただきまして、ありがとうございます。

仕事を増やすというお話でございましたが、ウエルカムでございますので、私どもの役所用語で言うと勉強会という堅苦しい言葉になってしまうんですが、例えば、本江委員からワークショップという言葉いただきましたが、なかなか皆さんお忙しいので、スケジュール調整大変なんですけれども、お集まりいただける方で何らかの形というのは考えてみたいと思いますので、我々事務方のほうで、日程等も含めて調整させていただきたいと存じます。

○本江委員

そうしていただければと思います。よろしく申し上げます。

○郡市長

では、よろしくお願ひ申し上げます。

それでは、音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点の施設概要について、皆様方からご意見をいただけてまいりたいと思いますが、まず、どのようなイメージなのか、これ

について説明をさせていただきます。よろしく申し上げます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料4-1、4-2が音楽ホールの資料となっておりますが、このうち資料4-1が概要をまとめたものになっておりますので、こちらで説明をさせていただきます。

資料4-1の、まず1の基本方針、それから2番の機能、こちらにつきましては、第1回の懇話会でお示しした内容とほぼ変わらない内容としてございます。

まず、基本方針といたしましては、仙台の文化芸術の総合拠点を目指していくということとしておりまして、様々な実演芸術の拠点としていくほか、本市の文化観光交流の新たなにぎわいを生む拠点、また、文化芸術の力を社会の様々な分野に生かしていく活動の拠点としていきたいと考えております。

2の機能には、この基本方針を実現するための機能として、①から⑥までの機能を掲げているところでございます。

3の事業、4の施設部分が今回新しくお示しするものでございます。

まず、3の音楽ホールの事業についてでございます。まず、①の創造でございますが、こちらは多様な作品の鑑賞機会を提供するとともに、仙台ならではの企画や作品の制作などを行いまして、それを発信するという言わば創造発信事業でございます。また、②の活力でございますが、こちらはにぎわいをもたらすような様々なイベントを行うとともに、青葉山エリアに関する情報提供や憩いの場の提供などを行っていくものでございます。③の発揮でございますが、社会包摂の視点に立って、子どもから大人まで全ての方が文化芸術に触れ合うことのできる機会を創出するとともに、教育や福祉などと連携した取組を行っていくものでございます。最後の④の育成でございますが、こちらは、プロを目指す人はもちろんのこと、趣味として活動する人や社会貢献活動をする人なども含めての育成ということでございます。

これらの事業を実施するための施設については、4に記載しております。音楽ホールにつきましては、4つのエリアが必要になると考えておりまして、それが表の左側に記載してあるエリアでございます。

まず、ホールエリアについてでございます。大ホールは、これまでもご説明してきましたように、2,000席規模の生音重視のホールでございまして、クラシックのコンサートのみならず、オペラやバレエなど多様な実演芸術に活用できるホールでございます。

次に、小ホールでございますが、大ホールと同様、生の音源を重視しつつも、多様な市民活動に使えるものとして、座席数については300席から500席としております。

次に、練習・創造支援エリアについてでございます。リハーサル室は2つでございます。オーケストラや合唱用の音楽リハーサル室と演劇などのための舞台芸術リハーサル室でございます。いずれも大ホールの舞台と同等の広さを確保し、リハーサルに適した空間といたします。また、椅子を置いて小規模な発表会も開催できるようにする方向で検討していきます。なお、両方のリハーサル室は、共に会議室としても活用できるようにいたします。

次に、練習室群と工房についてでございます。練習室につきましては、中小の練習室を複数設ける方向で考えております。公演を目指しての練習はもちろんのこと、市民の

日常的な活動の場としての利用も想定しているところでございます。また、会議室や控室としても利用できるようにいたします。工房につきましては、公演で使うような道具や衣装の制作のほか、ワークショップでの活用も考えております。

次に、交流・文化芸術力発揮エリアでございます。エントランス交流ロビーは、誰もが自由に集えるような空間とし、施設ににぎわいを生むようなイベントを行うことを想定しています。そのほか、総合案内や情報センター、展示スポット、カフェやレストランなども想定しているところでございます。

次に、ワークショップゾーンでございますが、ワークショップを行うための部屋を合計3室設ける方向で考えております。スタジオや創作アトリエのほか、小さな子ども向けのワークショップを行う部屋として、子どものための空間を設けたいと考えております。ワークショップがない日は、自由に開放して、小さな子どもが遊べるような空間といたします。

最後に、運営・協働エリアでございますが、こちらは、運営に必要となる事務室等でございます。仙台フィルの事務局や楽器庫なども含めて考えているところでございます。

そのほか、廊下や階段など共通動線も含めまして、トータルで2万9,000から3万平米の施設と考えているところでございます。

音楽ホールにつきましては、以上でございます。

#### ○事務局（田中震災メモリアル事業担当課長）

続きまして、中心部震災メモリアル拠点についてご説明を申し上げます。

本施設の概要につきましては、資料5-1、5-2としておまとめしてございますが、骨子でございます資料5-1に基づきましてご説明を申し上げます。

まず、1の基本方針でございます。こちら、第1回の懇話会から掲げさせていただいている、災害文化の創造拠点を目指してまいります。災害文化を「災害を乗り越えるための全ての知恵や行動である」と定義し、その知恵や行動を、時代の変化に応じてアップデートし続けていく「創造」、そしてそれを社会の仕組みや日常生活に織り込んでいく「実装」、こちらに取り組む施設を目指してまいります。

この基本方針に加えまして、改めて、この拠点をつくる意義と役割について4点ご説明を申し上げます。

まず、①「東日本大震災の記憶を呼び起こし続ける役割」でございます。3.11を忘れずに、市域全体の経験を今と未来を生きる市民に届け続け、その糧とし、次の災害を乗り越え、生き抜く人を育てる拠点を目指してまいります。

次に、②「災害文化の意義を広め、日常に織り込む役割」でございます。先ほど、災害を乗り越えるための全ての知恵や行動が災害文化であると申し上げました。また、人間が共に生きていく自然というものは、恵みと同時に災いをもたらすものでございます。その二面性を自覚しつつ、その自然と折り合いをつけていくこと、こちら災害文化であると考えています。そういった災害文化の必要性を発信し続け、生活や社会システムに生かしていく拠点を目指してまいります。

③「防災環境都市・仙台としての責務を果たす役割」でございます。本市は、防災環境都市づくりの取組を進めており、その中で培われたネットワークがあります。また、



環境活動や市民活動が盛んなまちでもあり、こうしたバックボーンから、行政主導ではない防災力向上に取り組む草の根の活動を展開できる可能性があります。多様な主体との協働を生かし、仙台から世界の防災力向上に貢献するための拠点を目指してまいりたいと考えています。

最後に、④「これからを生きる人に求められる『意識』と『ふるまい』を探究する役割」でございます。東日本大震災は、強烈なインパクトを我々に与えました。そして、宮城県沖地震を想定して備えていた我々にとって、それを超える想定外の災害でございました。想定をすることは、同時に想定外を生み出す可能性が生まれます。その想定外の災害や困難に対して人が見せる弱さや社会の表す脆さ、こういったものを認識する一方、そこから立ち直ろうとする強さを持つことを認識していく、そして、災害は起こり得るということを前提に、この世界で生きていくための「意識」や「ふるまい」を探究し続け、その「問い」を世界に投げ続けていき、迷い揺らぐ人々に共感や示唆を与え続ける拠点を目指してまいりたいと考えています。

次に、2の機能でございます。こちら第1回懇話会でお示しした6つの機能を本拠点において果たしていきたいと考えております。そして、各機能は相互に関連するものであり、特にシンボル機能については、音楽ホールと共に複合整備の軸である3.11を未来に刻み続ける機能です。

ただいまご説明いたしました機能のもとに展開される事業として、4つの方針をお示ししています。

まず、①「認知」でございます。こちらは「過去を知り、今を愛し、未来を守る人を育てる」ための事業といたしまして、市民とともに作り上げるアーカイブですとか、災害文化の創造につながるような展示、それらを文化芸術の手法も取り入れながら実施してまいります。

次に、②「創造」でございます。こちらは、「市民と共に災害文化を創る」事業として、多様な人々との交流、活動への支援、学びの促進、そういった事業を展開してまいります。

③「実装」でございます。こちらは「災害文化を日常に生かす」ための事業として、災害文化を日常に組み入れるための工夫や仕組みづくり、あとは3.11の経験と想いを未来に継承し続ける機能、そういった事業を展開してまいります。

最後の④「発信」でございます。こちらは、「災害文化を世界に広める」ための事業として、3.11の被災各地との連携やゲートウェイとしての機能、あとは世界各地をつなぎ、世界に発信していくための事業、そういったものを展開してまいりたいと考えております。

最後に、4.施設概要についてです。こちらにつきましては、中心部震災メモリアル拠点単独で建てた際の想定としてお示ししているものです。左に掲げました6つの機能それぞれを果たすためのエリアというものを想定しており、アーカイブエリア、常設展や企画展を行うための展示エリア、人々の交流を促す交流連携エリア、活動支援エリア、さらには音楽ホールとメモリアルそれぞれの活動が繰り広げられ、3.11を刻み続けていくためのシンボルエリア、最後は各地をつなぐハブ機能エリアでございます。これらに事務室や機械室等の諸室を加えまして、現段階では3,000平米程度の床面積を考え

てございます。なお、こちらの面積等につきましては、基本計画においてさらに精査を  
してまいります。

これらの機能、エリアは相互で連携しており、それぞれの活動の姿が見えるためのゾ  
ーニングというのをも併せて基本計画に向けて検討してまいりたいと考えております。

資料5-1の詳細や、事業の具体例などにつきましては、資料5-2でお示しをして  
おりますので、後ほどご高覧をいただければと思います。

引き続きまして、資料6のご説明にまいります。

ただいま、資料4、資料5に基づきまして、音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点  
個々の施設概要についてお示しをいたしました。先ほど本江委員、遠藤委員からもご  
発言がありましたとおり、目指すところは両施設の複合であり融合でございます。改め  
まして、複合のイメージについてお示ししたのが資料6でございます。

先ほど、ホール、メモリアルそれぞれ6つの機能をお示しいたしました。また、それ  
ぞれ4つの事業方針もお示ししたところでございます。この事業の中で、空間の共有が  
可能な事業、あとは連携を図っていける事業というのを、今後、委員の皆様のご意見等  
も頂戴しながら検討してまいらなければならないがございます。

複合施設の施設構成イメージでございます。ホール・メモリアルそれぞれのエリアに  
つきまして共用化を図っていけるところ、あとは空間デザインの中で複合の効果が最大  
限発揮されるような一体化などについて検討してまいります。

本日の議論の中でも、この資料6のような観点で複合、融合について皆様からの活発  
なご意見を賜れますと幸いです。

資料4、5、6についてのご説明は以上でございます。

#### ○郡市長

それぞれの施設整備、それから複合のイメージについて説明を申し上げたところでは  
はここから、委員の皆様方から直接ご意見を頂戴したく存じます。

発言に際してですけれども、最初にお一人ずつ順番にお話していただきまして、それ  
を踏まえてディスカッションという形にさせていただきたく存じますので、よろしくお  
願いいたします。

では、初めに梶委員からお願いします。

#### ○梶委員

それでは、私のほうからお話をさせていただきます。もともと劇場のほうの現場で企  
画、制作、運営をする立場としてどのように感じたかということを中心に話をさせ  
ていただければと思っております。

まず、音楽ホールの施設概要についてなんですけれども、このように基本方針、機能、  
事業、内容が明確にされているということは、中で企画、制作していく立場としては非  
常にやりやすいなというふうに印象を持ちました。今、東京ですごく難しいなと思っ  
ているのが、この総合拠点としての文化、観光交流の新たな核となるというのが、結構、  
東京は観光というのが逆に難しいところもありまして、ただ、仙台は場所としての魅力  
だけではなく、既に、クラシック音楽に限定しますと、国際コンクールですとか、せん  
くらとか、東京のほうからもかなり熱い視線が集まるような催しを既にやっ  
ていらっしやいますので、そういった意味でも新しい劇場が核となっていくというのは  
すごく可能

性としてはあるんじゃないかなというふうに感じました。こういうところがあるんだよと言われたら、制作する立場としましては非常にやりがいがあるといえますか、期待できるような施設になっていくんじゃないかなと思います。大変専門性が高くないとできないとは思いますが、やりがいがある劇場になっていくんじゃないかなと思いました。

また、今、ちょうど公立の文化施設の人たち向けにアートマネジメント研修というのをオンラインでやっているんですけども、そこで新国立劇場の舞踊の芸術監督の吉田都さんがちょうど今、インタビューに答えられていまして、事例としまして、イギリスの文化芸術を、ロンドンだけじゃなくいろいろな都市でやっていくということについてお話をされているんですけども、イギリスでは、どのような場所に行っても一流の文化芸術に触れるということが出来る仕組みになっていると、日本でもぜひそういうふうになっていきたいんだということをおっしゃっていたんですけども、まさにこの劇場がそういうことができるような劇場になっていくんじゃないかなと感じました。

それから、中心部震災メモリアル拠点についてなんですが、こちらは私の専門ではなくて、私の感想としてお伝えさせていただくんですけども、大変重要なことだと思いますし、10年以上たった今でも、そのときのことを私たちは思い出すことができます。私は、ちょうど劇場で仕事をしていましたけれども、地震の揺れだったりとか、その後起こったたくさんやらなければいけなかったことといたしますか、そのとき、ちょうどイタリアから劇場の方たちがいらっしやっていて、みんながテレビの前に集まって、津波にのみ込まれていくのを真剣なまなざしで見ていたこととか、そういうのはすぐ思い出すことができますが、逆に、それを知らずに生まれたお子さんたちがもう中学生になっていくというようなことも現実だと思いますので、ぜひ未来につながっていくような施設になっていただけるといいなというふうに感じました。

それから、この複合施設としての在り方なんですが、まず、ハード面に関しましては、音楽ホールの施設概要、これだけ充実していても、やはり混むときはすごく混み合っていて、施設を取り合うようなことも起こってくるのかなと。逆に、すごく閑散なときもある可能性はあるなというふうに思います。それぞれのやっているところが、必ず凸凹はあると思いますので、融通が利くような仕組みがあるといいんじゃないかなと、ハード面では感じました。

また、音楽ホールに来る方たちというのは、基本的には日常生活からちょっと離れたところで、例えばそれが生きがいだったり、楽しみだったり、ちょっと違う空間を楽しむに来るような人たちがほとんどだと思うんですけども、逆に中心部震災メモリアル拠点にいらっしやる方というのは結構超現実といたしますか、全く目的が違うところから来るというようなことになるのかなと思いますので、そこをうまく融合していくというのが重要なんじゃないかなと感じました。恐らく音楽ホールとメモリアル拠点を支えていく人たちというのはそれぞれ全く異なる専門性がある人たちが支えていくということだと思うんですけども、先ほど遠藤委員や本江委員がおっしゃったように、そこをどうやってうまくお互い手を取り合っていてやっていくのかということがこれから先も課題としてあるんじゃないかなと感じましたので、そこら辺の検討も必要なのかなと思いました。

以上です。

## ○郡市長

ありがとうございました。

それでは、垣内委員、よろしくお願いします。

## ○垣内委員

ありがとうございます。

私は、文化政策を専門に研究しているという立場からコメントをさせていただきたいと思います。文化という人の心、それから精神性に基づく活動に国とか、地方自治体とか、政府が住民のお金を使って、あるいは規制をかけるというようなことで関与していく、その妥当性というか、必要性といいますか、それがうまくいくのかどうかということとずっと研究してまいりました。その観点から、3点ほどお話をさせていただきたいと思います。

まず1つは、やはり文化施設って非常に重要です。特に、地方自治体、地域にあっては、一部の、ごく一部の大都市だと芸術文化のマーケットというのは非常に大きくて、そのマーケットでかなりの部分が充足されるということがありますが、一般的に言うと、どこの国でも自治体では必要な文化的な施設を提供し、そのサービスを住民の方々に提供するというのもう当然のことになっております。文化施設って非常に重要なんですけども、この文化施設の在り方を考えると、やはり活動、中でどんな活動が行われるのかということが非常に重要になってきている。逆に、どんな活動をする、今、非常に地域、文化、多様になってきております。人々が必要とする文化的なニーズも、東京周辺と例えば東北と、あるいは九州ともう全く違うということもあります。それぞれの地域性に基づいたサービスを提供するときに、どんな活動を想定するのかというのが非常に重要で、この活動内容が、逆にどんな施設が必要かを規定するということをつくづく感じるようになりました。

逆に言うと、ハードの制約が、その後必要な活動ができなくなる制約条件も与えていると、両方相まって関係性があるんですけども、その中でやはりうまくいっている、たくさんの方々がいろいろな形で利用されている劇場に関して見ると、やはり最初の実需というんですか、その地域の住民の方がどんなことを求めているのかということとをきちんと把握して、それに応えるということがまずコアにあって、もちろんそこに少し理想的な部分も含まれるだろうと思いますけれども、実需を基に様々なニーズをきちんと精査して、民間では、市場では成り立たないような施設だからこそできる、そういうサービスを提供することができる、多くの人々から賛同を得て、その施設は大切に使われていくというようなことが見えてきております。

今回、仙台でもこういう複合施設ということで、また例を見ない施設を造ろうとされているわけですけども、ここにどういう活動を盛り込んでいくのか、私はちょっとメモリアルのほうがあまり十分に知識がないものですから、音楽ホールだけで言わせていただくと、今、梶委員がおっしゃったように、こちらはまず仙台フィルという強力コンテンツがあって、オーケストラがある自治体ってそんなにないです、しかも、それを中心に様々なコンクールがあったり、クラシックのフェスティバルがあったり、しかもそれが定着して、市民の方々に喜ばれて享受されている、これはすばらしいことだと思う。こういったものをホストできるような施設という形でこの資料を拝見しますと、非常に

よくできた施設概要になっているかなと思います。

かつては、文化施設というと、箱物と言われて、なかなか十分な活動がないんじゃないかとかいうふうに言われていたんですけれども、この資料の4-1、それから資料のホールの概要のほうの冊子を拝見いたしましても、仙台が持っている文化力、NPOさんとか、文化団体とか、様々な活動がもう今、日々ある。それがなかなか施設的な、ハード的な制約があってできないところをうまく受け皿としようというところが非常にはっきり見えてきていて、ありていに言うと、日々誰かが何らかの形で使ってくださるんじゃないかというイメージが湧くという意味でこの骨子は非常によくできているなというふうに、ちょっと手前みそながら、文化、特に音楽などはすばらしい活動だと私自身も思っているものですから、ちょっとそこにバイアスがかかっているかもしれませんが、そういうふうに思います。

ただ、一方で、政策論をやっていると、日本に共通する課題、人口減少であり、高齢化であり、財政的な状況というようなことの中から、評価に耐え得る、今後もきちんとした評価に耐えて、市民の方々に存在意義を説明できるような、そういう施設であってほしいなと思います。そのときにはやっぱり戦略論が必要で、戦略というのは何をやるかを定めることではなく、何をやらないかということを決める。つまり、新しい施設ができると、こんなこともやりたい、あんなこともやりたいというお気持ちは非常によく分かるんですけれども、本当に必要なものは何か、ここの施設じゃなければできないものは何か、この施設だからこそ提供できるサービスというものをちょっと見極めていただく必要があるかなと感じております。

メモリアルにつきましても、同じかなと。メモリアルで必要とされている活動、今活動されている方のニーズ、ここが多分中心になって、そこにさらに将来的にここまでいきそうだということも当然見えてきているはずですから、それも含めてちょっと精査をするということが重要かなと思います。

融合施設って、なかなかうまくいかないことも多いんです。それは、A施設とB施設を足すと、AプラスBで、さらにシナジー効果が生まれるというところまでいかない理由の多分一つは、人の交流がなかなかできない、専門性が違うので、どうしても縦割りになってしまうという組織的な問題もあるように思います。ただ、そこはもう乗り切らなければなりませんし、融合施設の大きなメリットは、シナジー効果とともに、実は様々なものを共有できることによって、情報とか、施設とか、人もそうでしょうけれども、共有することによって効率化が図れるという大きなメリットがあります。つまり、インプットは同じなんだけれども、より大きなアウトプットが出る、こういうやり方を少し考えていく必要があるのかなと思っています。この施設が仙台市の市民の方々に届く、当事者意識を持ってもらう、そういう施設になっていただけるといいなと思います。

私は、兵庫芸文センターの事例研究を長年やってきておりますけれども、そこではやはり人々の支援というんですか、人々の芸文センターに対する評価というのは、もう明らかに上がっています。芸文センターは、当然のことながら、阪神淡路大震災からの復興のシンボルなんですよ。今、25年たったために、実は復興のシンボルというイメージを持っている方が少しずつ減ってきています。一方で、すばらしい芸術拠点であっ

て、特別な場所、自分たちにとって特別な場所という意識が大きくなっている。ずっとシンボルであり続けてほしいんですけども、兵庫県民として誇りに思う施設というのがちょっと伸びてきていると。それは、直接シンボルで残っていくのか、あるいはもっと普遍的な誇りとかプライド、シビックプライドですか、そういったものにつながるのかということかと思いますが、四半世紀過ぎて少しずつ成熟してきた姿が見えてくるのかなと思います。

この施設も、そういう形で市民の間に定着して行って、わざわざメモリアルと言わなくてもいいというとき、多分そこが一つの到達点であろうと思います。

以上です。ありがとうございます。

○郡市長

ありがとうございます。

それでは、遠藤委員にお願いいたします。

○遠藤委員

資料をおまとめいただき、ありがとうございました。

まず、今回の懇話会、第1回、第2回と皆さんとお話ししてきましたが、ちょっとまだ私の中でも熟成しないような部分もあり、その後もいろいろと考えてきてはいるんですけども、やはり今おっしゃっていただきましたように、今回の複合施設というのは世界でもまれに見るコンセプトを持つ施設だと思うんです。ですので、融合という言葉が今出ていますけれども、融合という言葉のもう少し上の価値を表現できるような言葉を表現していけたらいいのかなと。じゃあ、何だと言われますと、私も考え中なので、皆さんと一緒に考えられるといいと思います。融合を超えた、この施設ならではの価値というものを市内そして国内、海外に発信できるような、そういったことを言葉も含めて考えていきたいなと思っていますし、実際のオープンまでには時間があるので、その価値を、被災された方、もう既に活動支援をされている方々、文化や防災やメモリアルに関わっていらっしゃる皆さんと、そういったことを一緒に考える機会をつくれたらいいのかな、なんていうふうにも感じております。

体現していくのは、やはりそういった活動していらっしゃる皆さんが体現することになると思いますので、懇話会での話が実際の活動の方とも一緒に共感し合えるような中身に育てていけたらいいのかなと思いました。

そういった点で、今回、音楽ホール・メモリアルと骨子を出していただき、この複合施設、世界でもまれに見る個性のある施設にしていきたいし、なると思うんですけども、それを考えたときに、今、メモリアルと音楽ホール、別々に骨子をつくっていただいています、別々でいい部分と、共通でこういう価値、可能性がこの施設にはあるんだよということを打ち出すような、少し抜き出して書くのか、そういったものもあるといいのかなと思いました。

メモリアルもホールも、特に一般の方には事業のコンセプトがあって、その後で、じゃどんな事業だという、この事業のところにも、具体的に文化芸術とメモリアルを融合した事業のアイデアが出ていると思うんですけども、ちょっとそれを抜き出していただくと、より融合を超えて新たな価値をつくらうとしているんだなということが伝わりやすくなるんじゃないかと思ったんです。ですので、骨子プラス融合・創造的なものが

これだけ今考えられていて、一緒にそれを生み出していくんだよというような表現もあると、この施設の特性というものも伝わりやすいのではないかなと思いました。

そういう点では、資料6で、複合のイメージについて、どちらかという上の方が事業展開、下の方が施設構成ということになっていきますけれども、このイメージだけですと本当に機能をうまくすり合わせてできるのか、というようなところになるので、少し上位概念とセットにして、先ほどお話ししたようなものとセットにして表現できるといいのかなと思いました。

このピンクと青の重なるの部分ですよね、空間の共用が可能な事業、あと連携事業、このままで少しあっさりに見えますので、ここには具体的なイメージやアイデアがあって、これがいろんな価値や創造を生み出していくんだよということがしっかり分かるようなセットにさせていただけるといいのかなと思いました。

そして、ちょっとメモリアル側の話になると、災害や防災の取組というのは、仙台市もたくさん各部署でなさっているんですけども、私も少しずついろんなところと関わりがあるんですが、仙台の災害や防災に関する取組がポータル的に見える場所というのがないんです。例えば、今度3月に世界防災フォーラムがありますけれども、そのページに行くと、世界防災フォーラムのことは載っているんですけども、仙台市で取り組んでいるかなり先進的な防災の仕組みですとか、人材育成の仕組みということは全然リンクされていなかったりして、それぞれの部署がそれぞれですごく頑張っているんですけども、それが探しにくいし、行きづらいということが防災や災害において見るだけでも、そういう状態なので、すごくもったいないことだなと思うんです。

ですので、そういったことプラス文化芸術との融合ということは、オープン前からやれる可能性もありますので、そういったことなども両方の拠点が創造できるような事業案の中に入ってくると、実際にオープンする前から、そういったソフト的なことは活用できていて、そこで活動されていた方が実際にできた施設でさらに活動するみたいなイメージに進んでいけるといいのかなと思いました。

そして、人の交流とかシナジー効果を生むための色々な課題があるというお話を先ほどしていただいたかと思うんですけども、そういった点では、次回、管理運営手法などの検討というのものもあるんですけど、第4回だけでそこをやるのというのはなかなか難しいのではないかなとちょっと思っています。仙台市内の中でも複合施設が幾つもあるって、いい面もあれば、かなり教訓もあると思うんです。ですから教訓を、今までのいいことと教訓をしっかりこの複合施設で昇華できるように、そういった取組も懇話会の中だけじゃなくて、できるまでの間でしっかり発信して、自分たちのノウハウにできるようなことも、できたらいいのかなというふうに思っておりました。

プラス、そういった点では、人、組織同士、テーマが違う、あと専門家だけ集まるとまたうまくいかないということがありますので、協働のディレクター的な方をしっかり位置づけるとか、1+1がやっぱり2以上になるからこそ、この施設が価値を発信できると思いますので、そこはかなりチャレンジしながら考えていく必要があるのかなというふうに思いました。ですので、懇話会の項目の中にも、開館するまでにこういうことを検討する必要があるとか、研究する必要があるとか、そういったことなども載せていけるといいのかなと思いました。以上です。

## ○郡市長

ありがとうございます。

では、今野委員、お願いいたします。

## ○今野委員

冒頭の、先ほどの、もう一回議論の場が必要じゃないかというふうなところとちょっと重複することもあるかと思えますし、あとは、今、私お話ししようかなと思ったところ、大体もう遠藤委員さんにお話しされてしまったかなという感じがしています。

今回、両施設の概要のところを示されたことによって、私が率直に感じたことというのは、これまで2回のこの委員会の中で、キーワードというのは交流と人材育成じゃないかと私は勝手に捉えていました。そういうふうな視点で、音楽ホールのほうについてはそれがよく見えるんですが、震災メモリアルのほうになると、この主役って誰なのかな、というふうになんかちょっと思わざるを得ない状況です。

もちろん、自主的な活動をされていらっしゃる方々、たくさんいらっしゃいますので、そのような方々の活動拠点というふうな意味合いでは非常に意義のあるお話だと思いますが、そこからもう一步踏み込めないものかなというのが何となく心の中にちょっともやもやとしています。それが、冒頭のところの遠藤先生、それから本江先生のところのお話、そこのところにつながっていけばいいのかなという印象を持っております。

私から、まず、以上です。

## ○郡市長

ありがとうございました。

それでは、佐藤先生、お願いいたします。

## ○佐藤委員

私は、実演者なものですから、そちらの立場からということになるかと思うんですけども、現在、仙台市内のいろんなホールが改修に入っておりまして、市民センターも含めて、我々の選択肢がかなり減っている状況にあります。これは、いろんな活動をしようと思っている人たちからすると、とても活動しにくい状況ですので、ぜひとも一日でも早くホールを造っていただいて、これが市内のそういったホール関係の拠点という言葉がありますので、拠点にぜひなっていたきたいというふうに思っています。

それで、このホールのほうのスペースその他につきましては、一昨年ですか、本杉先生が報告書をつくってくださって、そちらのほうに出ているものと同じようなものだと思うんですけども、私は、こういうホールを一日でも早くつくっていただきたいというふうにずっと思っていた人間なんですけれども、そこに、正直なところ、このメモリアル施設のことが入ってきまして、今日、その具体的な数字が出てきました。これだけのスペースを同じ敷地につくった場合に、今考えているホールのスペースがちゃんと確保されるのだろうか、そのあたりが非常に心配になって過ごしてきたんですけども、そういった意味では、一番最初にお話がありましたように、遠藤委員とか本江委員がお話しになっていたように、そのあたりを少し、いろいろ腹を割った形でと言うと変なんですけど、やり取りのできる時間があると、とても、私もずっと第1回目のときからもやもやがあったので、それが解決できるかなと。それで、解決して先に進みたいというような思いがあります。



それで、いろいろ役割その他内容について、具体的なところがたくさん出てきたんですが、本当に両施設でこれが全てできるんだろうかと考えたときに、やはりもっと役割分担というんでしょうか、音楽ホールだったら、ホールで、例えば青年文化センターとこの新しいホールとどういうふうに役割を分担していくのか、あとは、ほかの各区にあるホールとどんなふうな役割の分担をしていくのか、それから、メモリアルのほうは、荒浜の小学校と荒井の施設と、新しいところとどのように役割を分担していくのかと、それによって、先ほど垣内委員からありましたように、ここで何をやらないかということが見えてくるといいますか、そういうふうにしていかないと、どんどんいろんなことが薄まっていくような気がして、そんな印象を持っていたものですから、そのあたりをまた次回までに少し話ができればうれしいなと思っておりました。

以上です。

○郡市長

ありがとうございました。

それでは、本江委員、お願いいたします。

○本江委員

本江でございます。ありがとうございます。

改めて、この両方の施設の概要を拝見して、大学では一般的なデザインプロセスの研究もしておりますので、設計方法論的な話で言うと、ものをデザインしていくときには、アイデアを膨らませて、どういう可能性があるかというのを最大化する発散のプロセスと、その中で具体的に何をするのかを決め込んでいく収斂させていくプロセスがあるとされています。音楽ホールのほうは、さすがに長い議論を経てきたということもあって、かなり具体性の高い、練度の高い収斂してきた案が出てきているのに対して、メモリアルのほうはまだ発散の段階で、あれもこれもやれるんじゃないかというのがみんな書いてある、最大このくらいという感じになっていて、先ほどから何をしないのか、どういうふうに絞り込むのかということが課題だと出ていますが、全くそのとおりです。しかし逆にちゃんと広げておかないと何ともいじましいものに終わってしまうこともあるので、段階としてはきちんと広げて、可能性をなるべく大きなパースペクティブに持っておくということは必要なプロセスなんです。とはいえ、具体的な施設を造るには決め込みが必要になってくるので、早い段階で音楽ホールに追いついて、同じレベルの議論をしているというふうに持っていかなきゃいけないということが、改めて2つ並べて拝見して感じたところです。

では、どうやって絞り込みに持っていくのかということ言えば、佐藤委員が先ほど言われたように、ポジショニングというか、役割分担をすることが必要で、残念ながら、今の資料にはそこが少し文書に書いてあるだけであまりちゃんとやられていない。何か新しいものを造ろうとしたら、今ある似たものの中で我々がどういう位置を占めるのかということがちゃんと分析されないといけないです。同じようなものがあるのにもう一個造るといのはやっぱりおかしいですし、かけ離れたものをつくってもおかしいですから、幾つかの既存施設・事業の中でどういうものがあって、その中で我々はどういうポジションを占めて、どういう独自性を発揮して役割を果たすのかということの分析が必要だと思います。

具体的には、仙台市の既に行っている事業の中で、震災遺構荒浜小学校とか、メモリアル交流館とかが既にある中でこれをもう一個やるということのそのポジショニングがあります。また東日本大震災関連施設が続々とオープンしておりますので、国のもの、県のもの、市町村のもの、いろいろありますけれども、その中でこの施設はどういうふうに違うのかということの分析が必要です。もう一つ、これは大きい話ですけれども、世界には様々な、災害文化と名乗っているかどうかは別として、災害を受けて、自分たちはこうありたいと考えてつくられた、あるいはなされている事業があります。中国の地震の施設とか、インドネシアの津波の施設とか、人為的な戦争などのものを含めればもっとたくさんありますが、そういう大規模な事故・災害に関わっている地域がどういうふうに再生して、そのことを引き受けていくのかという知見はいろいろな形であるので、その中の一つとしてどういうユニークさを持っているのかということの何か分析があつてしかるべきで、そうする中で、この役割は遺構に任せておこうとか、これは県でやっているからこっちでやらなくてもいい、というようなことをしながら、何をしないでおくのか、それは言い方を変えると何に注力するのかということについての分析があつてしかるべきで、今日の資料にはそれが明示的にはありませんが、あまり遠慮しないで、ほかの施設に対するリスペクトをちゃんとしながら、まだやられていないことをやるんですと、それが我々にとって必要だからですということの分析がちゃんとあるといいのかなと思いました。そうすると、おのずと、これをやるためのセンターなのだということがはっきりしてくるんじゃないかなと思います。というのが1点。

もう一つだけ申し上げますと、これも骨子の資料には省かれているんですが、それぞれの概要の最後のほうに組織と運営についての章があつて、どちらも一番最初の見出しは「多様な専門人材の確保」です。これは、繰り返し話しているけれども、そのとおりで、この施設がオープンするまで、数年単位で時間がかかるとすると、建物が完成してから事業を始めるのでは手遅れなので、なるべく早い時期に、もう始めなきゃいけないんだと思いますけれども、専門的な活動ができる人材でチームをつかって、この施設を具体化するプロセスにそのチームも当事者として関わりながらやっていく。関連するグループとのコネクションなんかも今のうちからきちんと鍛えていくということを先に始めておいて、その人たちが仕事をする施設がようやく出来上がったというふうにしなないと順番がおかしいと思います。

何か、建物ができたからといって、おのずと事業が始まるなんていうことはないわけで、オーケストラがあるからホールを造るので、やっぱり先にチームとしてつくり、その人たちが具体化のプロセスに参画すると書いてあるのは大変に重要なことなので、それを進めていくということをやるといことは、どういう事業をするのかということ言えば、むしろ本質的なことだと思いますので、何かその編成を早く進めるということは大事なことかなと改めて思ったというところでございます。

以上、2点で。ありがとうございます。

○郡市長

ありがとうございます。

では、本杉委員、お願いいたします。

○本杉委員

本杉です。

先ほど、今野委員から交流と人材がこの2つの複合施設の一つのキーワードじゃないかという話がありましたけれども、もう一つ大きな重要なテーマとして創造という言葉があると思うんですけれども、これは、すごく両方の施設にとって大事な活動の原点で、振り返ってみると、劇場関係で言いますと、明治の時代に帝国劇場が1911年にお堀の淵にオープンしました。それは、当時としては非常に画期的な建物でしたし、同時に、建物だけじゃなくて活動も画期的でした。歌舞伎の世界では、女子が舞台上に立てないので、女子の演劇学校をつくるとかということも宝塚に先駆けていち早く行われました。

それから、大道具の制作も、従来は劇場の中でつくっていたのをわざわざ別の建物を造って、そこで、東京芸術学校、つまり芸大の卒業生を雇って大道具をつくるとかということも行われました。うまくいきませんでしたけれども、オペラもやったし、オーケストラもやったし、歌舞伎もやった、そういう原点になった建物で、難しい問題もありましたけれども、とにかく一つのエポックメイキングとして造られた施設で、それはやっぱり舞台芸術を創造するというのが非常に大きな動機づけになっていたわけです。

それから、昭和の時代になって、やっぱり記念碑的なのは、梶さんが勤めていらっしゃる東京文化会館、1961年、それから日生劇場、1963年、この2つがほぼ同時期にオリンピック前にできた施設として忘れてならない重要な施設です。

東京文化会館は、ご存じのとおり、世界のトップレベルの公演をずっと最初の時点からやってきたし、今でも続けていらっしゃいます。施設も当時としては画期的ないい施設でしたし、残念ながら舞台の、側舞台は天井は低いんですけれども、それでも平面的な広さは当時としては画期的でした。フライタワーも十分とれていますし、それから楽屋の広さも、その後の施設に比べても、現在でも十分なくらいの施設として整えられています。

日生劇場は、独特の空間、東京文化会館も独特な空間がありますけれども、日生劇場はまた別な意味で独特な客席の空間があって、それからエントランスからホワイエに至るまでの動線も、ちょっと狭いんですけれども、非常にゆったりとした演劇を味わうのにムードをつくってくれる、そういった活動をしているところでした。

日生劇場でもう一つ特徴的なのが、組織です。非常に、30代の若手だった、当時の浅利慶太さんとか石原慎太郎さんとか、あるいは技術畑で言うと、吉井澄雄さんとか、演出では鈴木敬介さんとかという、そういったまだ若手の人材を集めて、それが日生劇場という私企業が彼らに託して運営を任せました。そこでオープンで行われたのがベルリン・ドイツ・オペラの「フィデリオ」だったという、非常にメモリアルなものです。そのときの手助けといいますか、仲介役をしてくれたのが吉田秀和さんだったというふうに聞いています。

そういったいろんな人たちの総合力によって1つの劇場がオープンして、かつそれが記念碑的な活動をしてきた、そのおかげで、劇団四季とかありましたけれども、ミュージカルが、非常に日本に定着して、子どもも舞台上に親しむようになったし、それから、もうちょっとポピュラーな世界で言うと、越路吹雪さんのような活動もそこでずっと行われてきたということがあります。ですから、何かそこでものをつくるといって、創造するということが人をつくることになるし、施設を造ることになる。そしてそれが将来の

子どもたち、あるいは大人たちの生活を豊かにしていくということにつながっていくんだという意味で、創造的な活動というのはとても重要だと。今回、この2つの施設は創造ということを中心にやろうとしている点で、非常に有意義じゃないかなと思っています。

その意味で、今回出てきたこの施設概要について見てみますと、非常によくまとまっているなとも思います。先ほど、遠藤委員が、施設が前に出てきているので、どんなことをするのかというのがちょっと薄いんじゃないかとおっしゃったけれども、僕はそこまでは思わないで、例えば、今、この2番目に機能という言葉がありますけれども、この機能という言葉が多分分かりにくいんだと思うんです。機能というと、どうしても建築的です。機能を思い出してしまうんですが、実はこれ、活動と読み替えてくれればいいんじゃないかなと思っています。

例えば、音楽ホールについて言えば、公演の活動、練習とか創造支援する活動と違って、そういうふうになってきていて、その活動をする具体的な事業というものが3番目に書かれていると。そのために4番の施設が必要なんだというふうに読み取れていくわけで、この2番目の活動と3番目の事業というものを丁寧に考えていくことが非常に重要で、確かに少ない回数でこれを全部具体的に頭にイメージして、施設まで落とし込むというのは非常に難しいことかもしれませんが、なかなか、どのくらい時間が必要かというのは難しいことなので、1回で済めばそれはそれでいいんだけど、きっと1回やるともう1回ということになるし、どんどん増えていってしまうということは確かにあります。

ただ、本江委員がおっしゃられたとおり、音楽ホールのほうが比較的長い時間をかけて考えてきたというプロセスがあります。それと、日本だけじゃなくて世界中にこういった同類の施設というのはあります。一方、もう一つのメモリアルのほうは、どちらかというところさくさんはないし、世界的にも多くない。だから、経験値としてもそれほどないというのがあるのかなとは思いますが。ですから、そういった意味で、まだ広がっている段階なんだというふうに理解すればそのとおりなのかもしれませんが、やはり、そうは言ってももう目の前に現実問題としてあるので、何平米にするのかというのはもうできるだけ早く決めていかないと、佐藤委員が心配するのとおり、自分たちが生きている時代にできるのかどうかというような話になりかねないので、そこはしっかりと見極めていかなければいけないんじゃないかなとは思いますが。

そういった意味で、もう一度中を見てみたときに、音楽ホールについて、私は1点ちょっと気にしているのは、先ほどの説明の中に、リハーサル室とかも会議に使いますというふうにおっしゃったけれども、それは多分隣を意識して言っているのかなというふうに思いましたけれども、僕はここで、会議もそういうときには、臨時的には行っていると思うんだけど、やはりそれは本来の使い方じゃなくて、本来はやっぱりリハーサルとか、練習とか、あるいは小さな公演とかという、市民の意見にも、100とか200席ぐらいの小さな施設が欲しいという意見がありましたけれども、そういった小公演を行えるような施設としてあってほしいなと思っています。それが1つです。子どものための空間というのはとても重要なので、これはぜひぜひ実現してほしいと思っています。

一方、メモリアルのほうに関して言うと、こちらの骨子のほうは、比較的、1ページ

なのであまり細かいところまで書いていないけれども、本文のほうを読むとかなり膨らんだような感じになっているので、これはもう少し整理してほしいと思うし、このメモリアルのほうで言う創造というのは、やっぱり私にとっては少なくともちょっと分かりにくいところがあります。創造とか、実装というのは重要なキーワードだと思うんですけども、ホールのほうで言うと、企画して、構想を練って、そして脚本とか台本があって、あるいは音楽で言えば作曲されたものがある、楽譜があって、個人個人が練習して、集団で練習して、そして発表なり公演をするという、そういう全体のプロセスを創造というふうに私たちは捉えていますけれども、メモリアルのほうで言うときの創造というのはどういうプロセスを経て創造と言うことになるのかというのは、残念ながら僕にはまだちょっと理解できていないので、そこは分かるようにしてほしいと思います。

一方、機能とか、ここで書いている2番目の機能、先ほど私は活動と置き換えたほうがいいんじゃないかというふうに申し上げましたが、この2番目のところと、それから4番目の施設というところで、ちょっと項目が多過ぎるように思うんです。例えば、このアーカイブとハブというのは、何か一緒のような、似たもののような気が僕にはしますし、両方とも発信とか、つなぐとか、共有するとかという言葉がやっぱりちょっと似ているように思います。それから、活動支援とかシンボルというの、あえて言わなくても、何か先ほどの今野委員のように、交流という言葉の中に活動支援というものも入ってしまってもいいような気がするし、実際、部屋の構成を見ていると、そういうのもいいのかなと思えてきます。

また、シンボルというものも、もともとこういうものですから、メモリアルなものですから、当然シンボルになり得るし、ならなきゃいけないわけなので、あえて言わなくてもよいというふうに思うので、初回のときに本江委員が言ったと思うんですけども、施設全体がシンボルになるような、そういうことであれば、十分にこの目的を果たせるんじゃないかなと思いますので、この辺はもうちょっと整理して行って、やっぱり毎日使うもの、あるいは非常に頻繁に使われるもの、1週間に一遍しか使われないとか、そういうものじゃないもので施設が構成されていかないと、納税者にとっては何のために造るんだということになりますので、そこは十分我々も慎重に考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思っています。

以上です。

○郡市長

ありがとうございました。

川内委員には、オンラインで参加いただいております。お待たせいたしました。では、お願い申し上げます。

○川内委員

どうもありがとうございます。

今、ほかの委員の先生方から言われたことに大分尽きているような気がしましたが、私なりの表現でお話をさせていただきたいと思います。

まず、それぞれの施設の概要、骨子についてご説明いただきまして、今回特に、施設を含めて出していただいたことで、大分それぞれの施設でどのような機能があり、事業

があって、そしてこういう施設が必要だということは具体的にイメージできるようになり、それぞれに固有の役割があるんだなということがよく分かりました。それがよく分かったがゆえに、やっぱりこの間の懇話会の中でずっと言われている、じゃあ1つの施設にしたときにどうなんだろうなど、「言うは易し、やるは難し」という印象を持ちました。

その後、資料6の複合のイメージについてもご説明いただきましたけれども、複合と融合というお話が並列で出ました。複合と融合って、恐らくちょっと意味合いとしては違う言葉だと思います。イメージ的に言うと、複合というところの2つのものがそれぞれあって、ある部分で一緒にやることで1つのものが出るということであり、一方、融合というのは、2つのものが溶け合い1つになることでより高いシナジー効果を発揮する。そういうイメージなのかなと思うんですけども、この施設としてどちらの方向を目指すのかという、どちらもあっていいと思うんですけども、そこがまだ曖昧な部分があるのかなと感じました。

僕の考えとしては、やっぱりそれぞれ固有のちゃんとした役割があるので、先ほど、遠藤委員が、融合のさらに上の価値を出せないかというお話もされましたけれども、一緒になることによって出せる価値というのはあると思いますが、それぞれありながら一緒になっていること、つまり、遠藤委員がおっしゃったような形を追求しつつ、それぞれがそれぞれの役割をちゃんと果たせるような、そういうイメージをもう少し具体的に考えていく必要があるのかなというふうに思います。そのためには、やはり事業という具体的なレベルから考える必要があり、例えば一緒にやれる部分はどこかとか、ここはやっぱりそれぞれ違うんじゃないかみたいなことを、冒頭で遠藤委員や本江委員のほうから意見があったようなことを行った上でイメージをつくらないと、ただ単に2つ並べて、何となく一緒にできそうなところを抽出して、はい、理念ですというふうな、何かそういう話にもなりかねないなという気がいたしました。

それと、複合という点にも関わると思うんですけども、メモリアル施設の概要について事例をちょっとお話をさせていただくんですけども、メモリアル施設としては、施設全体で3,000平米という数字が出ています。例えば、東日本大震災に関わる他の伝承施設や神戸の人と防災未来センターとか、震災に関わる施設が国内だけでも幾つかありますけれども、3,000平米という規模はそんなに大きな規模ではないわけですよ。

例えば、石巻にある県の伝承施設については、延床面積で大体1,300平米ぐらいと、それよりは広いですけども、この県の施設は展示スペースが大体700平米ぐらいとなっておりますし、一方、今回の仙台市の方は展示スペースとして550平米程度というふうになっております。それと、岩手県の陸前高田の伝承施設ですと、延床面積で7,000平米あって、展示面積も1,200平米ぐらいあるということで、そうした規模に比べると仙台市のものは小さな規模になります。ただ、それはそれでいいと思うんです。音楽ホールとの兼ね合いということもあるかもしれませんが、広ければいいというものではないと思います。ただ、やっぱりそうであれば、例えば被災したパトカーを置くとか、そう広さが確保できない代わりに、具体的に何をやるかということが重要になってくると思います。それが個々の事業の充実ということになっていくと思うんですけども、何をやるかということというのは、取りも直さず、そこにそういう事業をちゃんと行える

専門人材、専門的かつクリエイティブな人材がいるかどうかということが、結局その施設では何ができるかということにつながっていくと思うんです。

やはり、先ほどの本江委員のご意見と重なるんですけれども、ちゃんと人を確保する。これは、メモリアル施設だけではなくて、音楽ホールでもちゃんと芸術監督を置かなきゃいけないというお話も以前伺いましたけれども、どちらもこうした専門人材の確保が必要だと。それがないとやはり十分な事業が展開できない。このあたりは、今後この施設を具体化していくにつれ、予算化されていくと思うんですけれども、そうした点において、ちゃんとそれなりに人件費をつけて、その人が個々で十分に力を、それぞれの専門性があるので1人では駄目で、その人たちが十分な専門性を発揮できる環境をこの施設の中につくっていくということをやっぱり行政としてお考えいただきたいというのが希望として考えたところです。以上です。

○郡市長

ありがとうございました。川内委員、ありがとうございます。

今、皆さん一巡をしたところですが、既に議論の中で大事な点が幾人もの委員から御指摘をいただいていると認識しております。

まず、建設までの期間にいかに人材を見つけ出して、そこで何をどういうふうにさせていくのかということにもう少し注力すべきであろうというご意見をいただいたのだと思います。その点について、何かこういう形があるのではないかというような何かご私見があればご披露いただきたいというふうにも思いますし、その他についても何か付け加えることがあれば、ぜひ委員の皆様方からいただきたいと思うんですけれども、いかがでしょうか。

(垣内委員より挙手)

○郡市長

では垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員

この後でお話ししようと思っていたんですけれども、兵庫芸文センター、復興のシンボルとして建設が決まる前から、実はソフト先行事業というのをやっております、佐渡裕さんを中心にオーケストラ、楽団員が被災された住民の方々を回って様々な形でコンサートを行ってきたと、これが非常に大きな一つの実績となって、また人々の、県民のニーズ調査もしたらしいんですけれども、やはりこういうコンサートホールは必要だという大きな意見につながったというふうに聞いております。なので、いろんな先生方もおっしゃっていますけれども、開館したときがスタートではなくて、その前から様々な形で今ある方々の活動をつなげてこのホールに結びつけていくということも非常に重要なことだろうと思います。

ちょっと観点違うんですけれども、ミューザ川崎というホールがありまして、天井が落ちちゃったんですけれども、震災のときに、別の理由で落ちたんですが、あのとき、2年間クローズしていたときに、東京交響楽団が、準レジデントだったんですけれども、アンサンブルを組んで、川崎って南北に長いんですが、もういろいろなところでコンサートをしたと。それで、再開館したときには、ベルリンフィルだったということもあるんですけれども、満席になったというようなこともあります。だから、これは、パフォ

ーマーというんですか、芸術家とかNPOさんとかの活動をつなげるということだけではなくて、市民の間にサポーターをつくっていくということもありますし、活動するポテンシャルを市民の中に掘り起こしていくというようなことにもつながると思います。これはホールの事例ですけれども、多分、メモリアルのほうも同じようなこともあり得るんじゃないかなと思いますので、ソフト先行事業はなされたほうがよくて、それを検証しながら、PDCAを回しながら、最終的に新しい施設につなげていくというのが実際的にはいいかなというふうに思います。

○郡市長

ありがとうございました。

ほかの委員の皆様方からはいかがでしょうか。

(本江委員より挙手)

○郡市長

では本江委員、お願いいたします。

○本江委員

大き過ぎない形でいいと思いますけれども、準備室のようなものを組織して、メモリアルについて言えば、既に荒井にメモリアル交流館があって、準ずる活動をやっていますが、沿岸部のことにフォーカスするというミッションになっているので、この中心部メモリアルとちょっとポジショニングが違うので、こちらの準備室を立ち上げつつ、向こうの交流館のほうの活動とどうリンクするのかなとか、あと荒浜小学校をどう活用するのかなというようなことも、仙台市全体の活動の中で準備室をつくって、既にいろいろなところでやっている活動との渡りをつけながら小さなディスカッションの場を何度も設けていくとか、展示をやるんだったらばメモリアル交流館には企画展示室もあるから準備展示を何回か継続的にやるとか、いろんな形で施設的な整備をする前から活動は始められるし、そのための器も、ネットワークも既にあるので、そこからいよいよこれをつくるのだと、具体的な活動や必要なものについてフォーカスをして、みんなにいいのができたね、と言ってもらえる施設をつくりたいから知恵を貸してくれというような活動は一刻も早く始めるべきで、それはもちろん市役所の中のチームの仕事でもあります。再三言われたように非常に専門性の高い分野でもあるので、それを一緒にやる、役所で言うとか技監というか、専門家のチームと協働しながら進めていくというような形をつくっていくのがいいんじゃないかなと思います。メディアテークも使えるし、図書館とか博物館とか、部分的にはいろんなことが既に起こっていますので、先ほど、施設のマッピングとポジショニングの話はしましたが、事業の棚卸しをしつつ、まだやっていないことがあるね、と、このくらいはやらないと、災害文化って大きく出た割には何でもないねと言われちゃうといけませんから、そののこのところを見ていくような活動を、これはそれこそすぐ、小さくスタートして構わないと思いますので、やったらいいのではないかなと思います。

前回紹介した八戸市美術館なんかも、建物ができる前に、小さいですけれども街中に、準備室をつくって、一緒にまち歩きをやったりというようなワークショップを市民と始めるみたいなことはやっていますので、いろんなところである程度まとまった公共施設、特に新しいタイプのものをつくるときには、チームが先行して活動を始めて、いよいよ



できましたという感じでオープンするというのが今では普通のやり方になっていると思いますので、そうしたことをやっていくのが、やっぱり今回もちょっと新しいタイプのものですし、併せて音楽ホールもできますよということもアピールしながらやっていくのはできるんじゃないかなと思います。

○郡市長

ありがとうございます。

今、お話しいただきまして、次のテーマに移らせていただくことでもよろしいでしょうか。

どのように青葉山エリアの魅力と融合させていくのかということもあるかと思うんですが、その点についてそれでは議論を移らせていただくことにいたしますが、その前に少しお休みを頂戴いたします。それでは、3時45分から再開をするということで、恐れ入ります、5分程度ですけれども、少し休憩させていただきます。

(休憩・再開)

○郡市長

それでは、委員の皆様、45分になりましたので、再開をさせていただきます。

よろしく願いいたします。

青葉山エリアに立地する施設としての在り方について、次にご議論いただこうと思います。

それでは、担当から資料の説明をさせていただきます。

○事務局（佐々木文化企画推進担当課長）

それでは、資料7をご覧ください。

こちらの資料では、今回の複合施設を整備する場所が青葉山エリアであることを踏まえまして、特に考慮すべき3点につきまして記載した資料でございます。3点につきましては、(1)から(3)までに記載してある内容でございます。2番以降で順に説明してまいります。

まず、周辺環境を踏まえた建築上の配慮についてでございます。今回の整備場所は、広瀬川の清流を守る条例上、第一種及び第二種環境保全区域が一部に含まれておりますほか、景観条例上の景観重点区域になっております。さらには、緑豊かな青葉山エリアに立地する施設として、自然環境に配慮した建築が求められると考えております。広瀬川の清流を守る条例関連につきましては、外観上の配慮や、屋根や外壁の色彩に関しまして、ご覧のと通りの規制がございます。また、敷地内には、保全用地としてあらかじめ定められた基準以上の緑地を設ける必要がございますほか、20m以下の高さ制限がございます。

次に、2ページをご覧ください。

景観重点区域関連でございますが、街並みと調和した建築意匠とすることや、オープンスペースの設置等の規制がありますほか、先ほどの高さ制限20m以下の部分を除いては、30m以下の制限がございます。また、屋外広告物に関しましても、記載のと通りの制約があるところでございます。

次に、自然環境への配慮関連でございます。青葉山エリアに立地する施設として、自然環境への影響を可能な限り回避または低減を図ることが必要と考えておりました、杜の都の新たなシンボルとなる施設として緑化の推進や脱炭素化を図っていく必要があると考えております。

次に、3、MICEとの連携・協力についてでございます。

整備予定地は、現在主に駐車場として利用されているところですが、大規模学会開催時には仮設テントを設置して、会場の一部として使用してきたところでございます。本市はグローバルMICE都市になっておりました、MICEは市の重点施策の一つでございます。MICEの会場は、国際センターの会議棟と展示棟が主に利用されてきたところでございます。3ページの棒グラフに、本市の国際会議開催件数の推移をまとめておりますが、国際センター展示棟が整備された平成27年以降、国際会議の開催件数は720件ございまして、うち、下の表にある5件の医学系学会につきましては、写真のように広場に仮設テントを立てて開催をしてきたところでございます。下の表に記載があるとおり、頻度としては年に1回程度、複数日をかけて学会は開催されてきているところでございます。

4ページをご覧ください。

複合施設整備後のMICEとの連携についてでございます。複合施設整備後も、国際センターを核としてMICEが開催されることとなりますが、エリア全体としてMICE環境向上のための連携・協力が必要と考えておりました、記載の例のような形で連携をしていくことが考えられます。また、②にありますとおり、これまで開催されてきた大規模学会と同規模の学会が開催される際には、複合施設及び周辺施設を含めた形で開催が可能となるよう配慮する必要があると思っております、複合施設の優先予約やエントランス等の占有利用を認めるなどの特例的な取扱いをする必要があると考えております。また、複合施設としてのハード面を検討していく際には、MICEでの利用についても考慮に入れる必要があると考えております。

一方で、今回整備する施設は文化芸術と災害文化のための施設であるということから、MICEの優先予約については限定的なものとし、文化団体の優先予約も認めるなど、本来目的での利用に一定以上の影響が及ぶことのないよう、会場利用に関しては何らかの基準を設定していく必要があると考えております。

次に、4番、エリア内及び都心との回遊性向上についてでございます。

整備予定地は都心からやや距離のある場所であるということもあり、青葉山エリア内の回遊性や都心との回遊性の向上についても重要なテーマであると考えております。

まず、エリア内の回遊性についてでございます。(1)①には、先ほどご報告いたしました仙台・青葉山エリア文化観光交流ビジョン中間案でお示した回遊性向上の方向性を記載しております。5ページに、複合施設として考えられる取組を記載しております、エリア内施設等の連携では、周辺の文化施設や観光施設と連携したイベント情報の相互発信や連携事業・周遊促進事業の企画、また、その下のエリアの魅力を高める施設等の立地促進として、レストランやカフェ等を複合施設内に設置することもエリア内の回遊性向上につながるものと考えております。

また、(2)都心との回遊性向上についてでございますが、先ほどと同じように①に

はエリアビジョン中間案の内容を記載しておりまして、複合施設としては、②に記載のように、市街地で行われる音楽イベントへの会場提供、中心部商店街との連携では、チケットの半券を活用した割引サービスの提供などが考えられるところがございます。

なお、6ページには、青葉山交流広場から都心までの距離と徒歩の時間、美術館や博物館までの距離、時間を掲載しております。

以上3点につきましてご議論いただければと存じます。

説明は以上でございます。

#### ○郡市長

今、仙台のグローバルMICE都市としての取組にも寄与する施設として考えねばならないというような説明もございました。福岡などでは、港の見えるところに、海浜エリアにすごく大きな音楽ホールあるいは会議棟というのを集積させているという点でも、私もこういう取組もあるのかと思ったところです。

今、説明した件につきまして、それでは、委員の皆様方にご意見を賜りたいと存じます。

まず、また同じ回り方で、梶委員からお願いをいたします。

#### ○梶委員

それでは、私のほうからお話をさせていただきます。

3つの点についてなんですけど、周辺環境を踏まえた建築上の配慮ということは、こちらはもちろん当然のことだと思いますので、規定もありますでしょうし、意匠など当然のところとして捉えながら建築をされていくんだと思っております。

それから、MICEとの連携・協力なんですけれども、今まで、過去の事例もありましてこれをやっていくということをお話としては伺っておりますが、お互いウィン・ウィンの関係になるように、少し長い目を見た調整をすとか、そのようなことをしながら効果的にできるといいんじゃないかなと感じております。東京ですと、国際会議はもうここでやりますよというのが決まっているようなところもございますので、そこら辺が需要が違うということもあると思いますので、利用していただくことによって、ホールにとってもすごくメリットがあるような、そのような取組になるといいかと、理想かもしれないですけども、思っております。

それから、エリア内及び都心との回遊性の向上なんですけど、これはぜひ力を入れて取り組んでいただけるといいんじゃないかなと思います。ホールがあるところにホールしかありませんというふうになりますと、なかなか人も集まってこないということがありますし、例えば、東京ですと新国立劇場は新宿区にありますけれども、駅の本当に近いところにあるんですけど、日常人が全然いないということがすごくやはり課題だと伺っております。

上野は大変恵まれていまして、文化施設がもう近所にたくさんあるので、いろいろな方たちがいろいろな目的で上野の駅を降りて、私たちの劇場の前も通っていくと。できるだけホールに来る方たちだけではない人たちの目にも入るようなことが求められていくと思いますので、ぜひここら辺は力を入れて開発し、いろいろな人が地域の前を通っていくというような環境を整えていただけるといいんだというふうに思いました。

以上です。

## ○郡市長

ありがとうございます。

それでは、垣内委員、お願いいたします。

## ○垣内委員

ありがとうございます。

こういう施設が立地するエリアとの関係って非常に重要であろうと思っております、私はちょっと文化施設のほうに専門なものですから、劇場で言いますと、意外にそのポテンシャル、大きいです。

劇場に来るような方々、特に文化施設に来るような方々というのは、可処分所得も大きくて、それなりに消費もされる方々なんです。意外にあまりみんな食べていないというふうに言っても、飲食それから物販もそれなりにあります。ただ、問題はそのポテンシャルをどうやって生かしていけるのかということです。周辺に、先ほどちょっと新国立劇場の話も出ました、隣のタワーのショッピングセンターまで行けばいいんですけども、行かずに地下鉄に入って帰ってしまうというようなことになると、なかなかそこに消費が落ちないということがあります。全国区で見れば、どこかでみんな何か食べているわけだからいいんでしょうけれども、ここに消費を落としたいということであれば、やはりそこに、動線の中にそれなりのホスピタリティーを提供するようなサービスがないと難しいというのは非常に実態としてあるかなと思います。

私も、このあたり何回か歩かせていただきましたが、すばらしい美術館はある、博物館もあり、今、クローズしていますが、市の博物館もあって、とてもいい場所なんですけれども、一部は公園の中で本当にいいんですけれども、車通りをずっと歩いて行かないと美術館に行けないとか、ああいうところはなかなか人は歩かないので、何ていうんですか、ウォークブル、ちょっと時間がかかっても、多少、5分、10分遠回りであっても、その周辺が歩けるような、散策できるような遊歩道的な誘導ができると、そこに人流があり、これ、卵と鶏みたいな関係ですけれども、人流があればカフェもできると、いろいろな形で次につながる活動もあるかなというふうに思われます。なので、そこら辺、どうやって人が歩いて移動、気持ちよく、心地よく歩いていていただけるのかというところをぜひこのエリア計画の中で、盛り込まれてはおりますけれども、実際に整備していただければというふうに思います。

それから、2つ目は、劇場なんかの場合、上映しているときは非常にお客さんが来るんですけれども、大量に来過ぎて、カフェで吸収しきれない。吸収しきれないので、もうカフェでは食べられないと思ってほかで食べてくるとか、こういうようなことがあるので、そこら辺うまく需給バランスがとれるような形で連携をするということも必要かなと。お店とか、カフェとか、様々なものが必要な時に出てくるというやり方です。

能登の演劇堂なんて、公演、ロングランするときだけですけれども、地元の人がテントを立てて、そこでいろんなもの、物販、かき飯とか、何とかのソフトクリームとか、もう完全に売り切れます。そういうポテンシャルをどううまく生かしていくのか、常日頃そこにいらっしゃる必要はないので、そこは機動的な動き、柔軟な動きができるようにしていただければなというふうに思います。

それから、3つ目のM I C Eとの可能性なんですけれども、これは市の重点施策でも

あろうと思いますし、MICEの方々にこういうすばらしい施設があるということも知っていただくというのもすばらしいことだと思うんですけれども、やはり文化芸術、メモリアルもそうなんでしょうけれども、この時期は絶対に外せないという、3.11の時期であったり、コンクールの時期であったり、そういったところはやはり戦略論的に、第一義的に使うべき人たちが使えるようにしていくということも非常に重要なことだろうと思います。

MICEについては、ユニークベニューというのがものすごく重要になってきているようで、会議が終わった後にちょっとしたコンサートを提供するとか、結構文化施設もやるようになってきて、非常に喜ばれているし、いろんな意味で財源にもなりますので、そこは積極的にやってもいいかと思うんですけれども、コアになる活動を阻害しないような形でぜひ進めていただければと思います。

以上です。

○郡市長

ありがとうございます。

では、遠藤委員、お願いします。

○遠藤委員

周辺環境のところですけども、ご記載いただいているように、一度施設を建ててしまったら、もう50年、100年と変えることができないわけですので、やはりここに書いていただいたことを尊重して、進めていくことが大事なかなというふうに思っています。

ですので、設計や建設に当たっては、国際コンペのようなものをされるのか等、手法も検討になると思うんですけれども、制限があるからこそ創造的になれる面もあるかと思しますので、そこは、世界各地の専門家の皆さんのお知恵を借りながら、この制限がある中で十分に創造的なものをつくっていきけるといいのかなという点で、私も今からわくわく、楽しみにしているところであります。

3番目の「MICEとの連携・協力について」という点では、東北大学さんは大事なエリアの地域資源であり、かつ重要なパートナーだと思いますので、そういった点では、それぞれ様々なテーマの皆さんがお互いに協力し合って、仙台ならではの事業を回すという形をつくれるといいのかなと思うんです。東京と違って、そういった拠点が都内の各地にあるというわけではありませんので、限られた場所をそれぞれのテーマ、分野がいかに効果的に、効率的に活用していくかということを通じて、この複合施設をさらに発信して知ってもら。今日はコンサートで来たけれども、今度は緑彩館のほうに行ってみようかなとか、今度お客さん来たら、あっちでバーベキューしてみようとか、相互にとってもメリットがあるんじゃないかなと思っていますので、東北大で学んだり研究された皆さんが世界各地に行つて、さらに魅力とか価値を高めていただけるような場所になれるといいのかなというふうに思いました。

あとは、エリア内の回遊性のところです。この点も、とても重要だと思っておりまして、今野委員がいらっしゃる商工会議所さん、色々な事業者さん、特に飲食とか物販の皆さんとも連携する必要があるという点では、どういうふうな可能性があるかということも事業者や飲食の皆さんとも何か検討していけるような機会があるといいのかなと思しました。

今、各地でキッチンカーとか、いろんな物販をその日その日に合わせながら、お店選びなんかもコーディネートするような企業も出てきたりしていて、仙台にあるかどうかは分からないんですけども、首都圏などでは、空地活用でテーマを設けて、キッチンカーや物販の店をコーディネートするような事業体もありますので、そういった取り組みがあると、このエリアだけじゃなくて、例えば沿岸部とか、ほかのところの活性化にも寄与するようなものができるんじゃないかなということ、常設の物販、飲食でなくても、仙台の魅力、あと東北の魅力を発信する場所としてぜひ活用する拠点になれるといいんじゃないかなというふうに思いました。以上です。

○郡市長

ありがとうございます。

では、今野委員、お願いいたします。

○今野委員

じゃ、手短かに3点。

まず、建築上の配慮の部分、これはおっしゃるとおりという感じなんですが、できればやはり青葉山との景観の一体性というのは、これはぜひ守っていただきたいです。ですから、例えば屋上緑化をされるとか、少し憩えるような場であっていただければなというふうに、あくまでも私の希望です。

ただ、これって意外とMICEなんかとの関わりもありまして、コロナでハイブリッド型が増えているということなんで、どういう活用ができるかというときに、天候なんかによるかもしれないけれども、ホールだけでなく屋外で、というふうなものは時期によっては非常に喜ばれるものになっていくのかなと思っています。

あと、最後の回遊性です。先ほどもお話出ましたけれども、それぞれいろんな施設が、文化的な施設が集まっている地域ですので、情報連携というふうなところはもちろんだと思います。その中で、美術館にしても、博物館にしても、何かしらの展覧会をやっているよという目的のためにお越しになる方が比較的多いと思いますので、そういう方々に、例えばこの複合施設でこんな楽しみ方ができますよと、こんなことが体験できますよというところのアピールをぜひ強調していただければなという感じがします。

あと、さっきのお話ともちょっと通じてくるんですが、意外と、一番最後の資料のところには地図で距離感出ていましたが、400m、500mって結構あるんですね。もちろん天候なんかによるわけですけども、ホールの飲食施設がいっぱいだから、じゃちょっと緑彩館開いているかもしれないからといって行って、そっちもいっぱいだったというときに、お客さんがどういう動きをするかなというふうなことなんかを考えますと、やっぱりキッチンカーの活用ですとか、あとはどうしてもそれを食べるスペースなんかが必要になってきますので、そういうところを本当に、屋上を庭園化して、そこで活用いただくというようなこともうまく複合していくと面白い施設になっていくのかなという感じです。

以上です。

○郡市長

ありがとうございます。

では、佐藤委員、お願いいたします。

## ○佐藤委員

私も、1番目の建築上の配慮の、恐らく仙台市に関係する皆様方の知の結集で、必ずやすばらしいホールが建つと僕は信じているので、この条件の中でぜひ建物を造っていただければということだけです。

MICEとの連携は、やはり地元で何か音楽活動しようと思っている方々は、5年後ぐらいの計画というのは立たないので、どうしてもやっぱり来年、再来年あたりのところで使いたいというふうになりますので、学会なんかはもう4、5年先というお話ですので、そこのところはやっぱり、大規模学会というのは、年に1、2度のようなので、そういったことであれば、私たちもそこの会場を使うことができるかなというふうに思いますので、どんどん増えていかないことを私は切に願いたい。別に東北大の皆様にけんかを売るわけではないんですけれども、私たちも使えるような状況を必ずやっぱりつくっておいていただきたいというふうに思います。

あとは、3番目ですが、この回遊性というのはやっぱり一番大事かなと思ってまして、やはりコンサートに行くときに、私もお昼を食べたり、終わってからちょっと一杯飲んだりという、それもコンサートに行く楽しみの一つですので、そういったことがこの文教地区の中に、それぞれにレストランがありますね、そういったところを、今、400～500mは確かに離れているという、歩いていくと、という印象はあるんですけれども、そこを何かうまく活用できるようになるといいだろうと、ちょっとアイデアがないんですが。

あと、恐らくコンサートのとき以外であっても、あそこのレストランに今日はちょっとお昼食にいきましょうとか、そういったレストランといったものがホールにあるといいなと思っています。そんな形が本当にできるといいなと願うばかりですが、どうぞよろしく願いをいたします。

以上です。

## ○郡市長

ありがとうございました。

それでは、本江委員、お願いいたします。

## ○本江委員

ありがとうございます。

大方、皆さんのおっしゃったとおりだと思います。幾つか補足をする、建築の規制は当然守らなきゃいけないですけれども、最大30mの高さ制限というのは結構きつくて、そんなに易しくないです。それなりの工夫の要る建築が要求される規制がかかっている、もちろんその制限を分かっている市で計画しているので、自分でルールを緩めたりできないと思いますが、そんなに簡単じゃないなという感じを持ちましたというのが1個。

それから、MICEのことですが、メモリアル拠点のミッションから言えば、これは大歓迎で、来ていただいて、ついでに展示も見ていただいて、仙台ってこういうところだなと世界中の人に知ってもらい、願ってもない誘客のチャンスです。それから、多くの学会というのは、せっかく仙台に来たんだからとエクスカージョンのツアーなどを併せて企画をしたりするものなので、そういうお話があったときに、ぜひ震災に関わる災害文化ツアーのようなものを学会と併せてやられたらどうですかと逆に売り込む機会に

使っていただけるような、この施設の問題だけじゃなくて、そういうふうにすることもできるかなと思いながら聞きました。それが1個。

それから、回遊性のこともそうです。400mは結構遠いです。近隣の土地が大きな土地ばかりだから、人通りがあって、商機があるなど思っても、誰も何も手を出すことができないという、そういうタイプの敷地割ですね。最近では公園にカフェをつくってもよくなったりしているので、やり方はすぐには分かりませんが、そういう民間の小さなアクションを受け入れられるような土地利用の可能性がある場を沿道につくっておくとか、これは都市計画的な話だと思いますが、そういういろんな人のアイデアが民間レベルから出せるような、それを受け入れられるような土地の使い方の整理があるといいのではないかなと、ちょっと抽象的ですが思いました。

それから、回遊性に関わって、あまり議論に出てこなかったなと思ったのは、川向こうからの見え方です。緑彩館のお話をするときにも少しお手伝いしたんですけど、あのときは大橋という大手門のところに古い橋があって、あの橋から川向こうに見える建物と背景になる青葉山という、それが景観のセットで、橋を渡るという経験と組み合わせ考えてみたいなことを話した。だけれども、こっちは仲の瀬橋が、残念ながら歩いて渡るにはあまり魅力のある橋ではないので、あまり論点になっていません。でも、本当は、景観上はあそこをぐっと見て、川があって、ホールがあって、大学があって、山が見えてという、景観のセットを成して、たとえば子どもたちに写生をしてもらうときにはいいポジションになるはずなので、視点場としての橋とセットで景観を考えることはやっていいなと思っております。あの橋を、権利的に触れないのかもしれないけれども、積極的に考えるといいかなと思っておりました。川とセットというのがすごくいい景観の資源だと思いますので、そこがあるなと思います。

もちろん、地下鉄から一瞬見えるというのも面白い経験なので、そこも意識をされるといいなということがもう一個。

あとは、沿道で、東北大学が結構大きな間口を占めておりますが、この資料の中だとあまり手が出ないみたいに記載されておりますけれども、そんなことはないはずだと思いますので、この施設整備を青葉山でやるから、東北大学も積極的なポジショニングをして関わってくれと。このおずおずと散歩道のほうを通り抜けさせるだけじゃなくて、もうちょっといろんな関わりを持ってくれと頼んでいただいといますし、必ずや応えるものと思っております。大学側の関わりというのをもっと積極的に位置づけていくような働きかけを、しっかりされるといいのではないかなと思いました。以上です。

#### ○郡市長

ありがとうございます。

では、本杉委員、お願いいたします。

#### ○本杉委員

3つ4つお話ししたいと思うんですけども、最初に、皆さんが話している回遊性、やっぱり非常に重要なテーマだと思います。それで、お金の事を無視して言って申し訳ないんですが、ぜひミレニアムブリッジみたいなものをつくってほしいなと。川を渡るペDESTリアンの、ロンドンのオリンピックのときに、テムズ川を渡る、ちょっと揺れが問題になりましたけれども、ああいう歩行者専用の橋で、西公園側とうまくつないで



いく、かつ川べりともつながっているようなものができるといいなと思うんです。

やっぱり、確かに400mが遠いとおっしゃられると、そうか、というふうに答えるしかないんですけども、僕らにしてみると、歩く、十分に楽しめる距離だと思うので、場所なり空間さえよければ、それが1つ、まず、回遊性を高める上での目玉になるんじゃないかなと思います。もちろん、すごくお金のかかることなので、簡単なことじゃないと思うんですけども、長いことかかってもいいと思うので、同時じゃなくてもいいと思うので、将来的にそういうものがあるとより回遊性が高まっていく。

川べりのところの青葉山エリア文化観光交流ビジョンの中にも幾つか書かれていますけれども、このエリアの価値を高めていく上で、歩行者をどうやってつなげていくかというのは大変重要なことじゃないかなと思うんです。

もう一つは、川べりとの間、前回、たしかロンドンのフェスティバルホールのところの川べりのところのお話をしたと思うんですが、ああいうような川べりの散策路というものにはぜひ魅力的に整備されていかれるといいなと思うのですが、もう一つ、イギリスの例で思い出すのが、グラインドボーンオペラハウスがありますけれども、あそこは、劇場にホワイエがないんです。その代わり、休み時間とか開演前は、皆さん、庭で待ったり休憩したりするんですが、それを彼らはピクニックと呼んで、自分で用意できる人はバスケットを持って、ワインなりシャンパンなり飲物を持って、そこで遠足みたいな形で広げて食べる、家族や友人たちと、そういうような感じの場所ができるといいなと思うんです。

もちろん、ホワイエはホワイエで必要なんですけども、今回の場合に関して言えば、冬なんかはたまりませんから、グラインドボーンはフェスティバルなので、特定の時期しか開いていないので、ホワイエなしでやっていますけれども、そういうような外部の空間をぜひ整備していってくれれば、皆さんが話していらっしゃるようなキッチンカーも来るでしょうし、家からそのためだけに来てくれることも可能じゃないかなと思うんです。レストランなんかは整備しなくても、整備なんかしなくても、と言ったらちょっと語弊があるけれども、それは整備してあれば越したことはないんですけども、そう簡単に outlet してくれないと思いますし、outlet を促すにも、従来の行政がやっているような入札システムじゃとても来てくれる人はいないので、やっぱりそういう人を選ぶときには、入札じゃないもっと別な評価軸で、ぜひ来てもらいたいところを呼ぶというふうにしないと、安いからどうぞ、というんじゃ話にならないと思うんです。やっぱり、人々にとって、皆さんにとって魅力的なレストランなりカフェなりしないといけないわけで、安いカフェをつくったって意味ないわけで、それはもうまちにいっぱいあるわけですから、そうじゃない魅力的なカフェをつくるなりレストランをつくるということの選び方をしてほしいなど。ちょっと余談になっちゃいましたけれども。それが、魅力的な外部空間というものもぜひ整備してほしいなど。それは、この交流ビジョンのほうに書いていらっしゃるのでも、ぜひ進めていってくださるんじゃないかなと思います。

もう一つ、外のことばかり言ってあれなんですけれども、駐車場のことがよく問題になりますけれども、仙台市がやっているかどうか僕は知らないんですが、地方都市に行くと、まちによっては、まちに入ってくる途中に、どこの駐車場が空いていますという、駐車場を誘導するようなシステムがあります。そういうものがあれば、別にここで全部

を賄う必要はないわけですので、都市全体の中で整備していけばいいですし、やっぱり便利さというのは裏腹で、目的地に行って、そこからまた帰っちゃえばおしまいなわけで、やっぱりそこで目的地に行く間にまちを歩いてもらえるとそののところで人がとどまって、対流が生まれて、消費が喚起されるということになると思います。

私が以前関わったプロジェクトでも、松本では駐車場がほぼゼロなんです。身障者の駐車場しかなくて、敷地内には。そのときに、駐車場がないことをやっぱりまち全体で整備していくというものもありましたし、やっぱり中心市街地が廃れていってしまうために、むしろ積極的にまちに出ていってもらう、歩いてもらうということのために、あえてということはないんですけれども、その敷地だけで駐車場を考えるんじゃなくて、まち全体で駐車場を考えるということを推進してつくりました。結果的に、意図どおりになっていったんじゃないかなと思いますし、だから決して、この敷地の中だけで全部を解決するというじゃなくて、広域的に考えていていただけるといいなというふうに思うんです。

そういうこと全体を通じて、都市の魅力をどう向上していくのか、高めていくのかということにつながるわけで、先ほど来、垣内委員がおっしゃったように、川崎なんかはまさに工場のまちから音楽のまちになった、なったと言ったら失礼だけれども、もうみんなそういうふうに自負しているわけで、そういう価値といいますか、文化的な魅力というものを持つポテンシャルは仙台には十分にありますし、既にあるわけですので、ますます高めていってほしいなと思います。

以上です。

○郡市長

ありがとうございます。

では、川内委員、お願いいたします。

○川内委員

青葉山にこの施設を造る際の在り方ということで、まず概要に、青葉山が仙台はじまりの地だということが述べられていて、これは、以前この複合施設を造ることを発表したときに、市長がこの点大変強調されていたと思いますし、そのことは大変重要だというお話は、第1回の懇話会でもさせていただいたと思います。なので、やっぱり青葉山に造るということに大変積極的な意味があると思いますので、造るに当たっての規制等については十分な配慮が当然必要であるということは思います。それに加えて、私は歴史家ですから加えさせていただきたいと思うのが、今の青葉山交流広場、あの場所に造るに当たって、やっぱりその場所に重なっている歴史というものを空間の中で感じられるような仕組みが欲しいかなというのが感じたところです。

というのは、今年1月の市政だよりで、市長がサンドウィッチマンのお二人と対談されていた特集を拝読したんですけれども、その中で市長がこの複合施設のことについて触れられて、あの場所はかつて、サンドウィッチマンの伊達さんのご先祖、大條家の屋敷跡があり、そして伊達さんの母校である仙台商業高校のあった場所なんですよという、そういうお話をされていて、伊達さんも、この施設ができて新しく生まれ変わるのが楽しみだということをおっしゃっていたのを読みました。あの場所は、仙台城ができ、仙台のまちが始まり、そこから400年の間で様々な歴史が折り重なっていて、そしてこれ

からは仙台の文化芸術と災害文化の拠点となる。その土台の上にあるんだというのを、建物そのものでなくてもいいので、あの空間のどこかに、具体的にはそういう話を書いた説明板などを置いたりとかという話になってくるとは思うんですけども、そういうこともあってもいいかなということも1つ感じました。

それと、MICEとの関係については、これは本江先生と全く同意見でして、MICEの期間は十分に複合施設を使えないというマイナスのこととして捉えるのではなくて、むしろ仙台の文化芸術、災害文化を日本や世界の人に発信する機会であるというふうに前向きに捉える。そういう機会として、むしろ今後の具体的な事業構想等の中に組み込んでいくということも考えていいというふうに感じました。

それと、3点目の回遊性ですけども、これも歴史家の視点から、特にメモリアル観点からお話をさせていただきますが、このメモリアル拠点では、単に3.11というものを一つの大きな核としながら、これまでの仙台の過去の災害を乗り越えてきた文化、そういうものを災害文化として位置づけて、これから世界へと発信をしていく拠点ということになるんですけども、例えば仙台で言うと、海岸部にはメモ館があって、荒浜小学校があって、荒浜地区の住宅跡等も整備されて、あそこに行くと、震災の傷跡というものを十分に感じることはできますが、今、仙台の街中を歩いていて、ほとんど3.11の記憶というか、そういうものを感じる機会というのが大変少なくなっています。一面では、それは復旧・復興は進んだというプラスの面ではあるんですけども、やはり震災を伝えるという面では、この街中を歩いているだけではなかなか難しくなっている。できれば、そういうものをバーチャルな形、今だったら案内板をつくって、二次元コードを読み込むと当時の同じ場所の写真が出るとか、そういう仕組みも幾つかありますが、まちのそれぞれのポイントにそういう震災の記憶を残すような仕組みをつくり、そういう災害文化というものを通じて、拠点と街中を歩くツアーのようなものですか、3.11だけではなくて、例えば、仙台のまちというのは、江戸時代や明治には、市内の多くの部分が水没するような水害被害を受けた歴史があります。

ちょうど私は今、明治22年に仙台中が水没をした洪水被害に関する資料を学生の皆さんと一緒に読んでいます。今の仙台ではほとんど死語になっていますが、仙台三十八橋という言葉がかつてあって、仙台に38の橋があったと。その多くは、現在は全て暗渠になっている四ツ谷用水がかつて地表に出ていて、それを渡る橋が実は市内にたくさんあって、これが水害のときに全部落ちたという記録があるんです。かつては、仙台は水の都というような景観が広がっていた。今は仙台の多くの部分が浸水したという、そういうことはもはや記憶としてはほとんど残っていない。記録としてはあるんですけども、市民の記憶としては残っていない。そういうものも発掘して、街中で歩きながらそういうことも知れるようなツアーを企画し、それと、青葉山に造る施設をつないで、災害文化を軸にしながら回遊性を持っていく。

さらに言えば、歴史の話であれば、それと同時期に仙台市博物館のほうで、そういう仙台の災害に関する企画展を持ったりして、先ほど言ったように、メモリアル拠点は面積的には広くないところですので、ほかの施設と関連する企画を組んで、全体として災害文化を高めるような事業を行う。そういう形で、エリア内もしくは中心部も含めた回遊性を確保していくというような事業を興す。そういう施設の在り方だけではなくて、

これからこの施設で行っていく具体的な事業の中でも回遊性を確保するような、そういうことも考えていく必要があるのかなというふうに感じました。以上です。

○郡市長

どうもありがとうございます。

1番の規制につきましては、場所柄、それは当然だという中で、いろいろと知恵を絞ってすてきな施設をつくるべきであろうというようなことで、皆さん一致していたかと思えますし、MICEについても、それはそれで生かしていくべきだというご意見で一致していたと思えます。

また、回遊性については、本当に幅広くご意見いただきました。本市のあのエリアのみならず、広いエリアでのまちづくりに直結するようなご提言もいただけて、大変ありがたいところでした。ありがとうございました。

一巡だけだったんですけれども、何か補完したい、あるいはもう少し議論をこの点で深めたいということがあれば、いかがでしょうか。よろしいですか。

(発言の声なし)

ありがとうございます。

それでは、活発なご意見頂戴いたしました。本当に皆様方、委員の方々の思いというのが込められたご意見をたくさん頂戴したかと思えます。

それでは、別途ご意見のある方については、事務局に直接お話をいただけるようお願いをしたいと思います。

今回は、複合施設の基本理念を含む施設整備の考え方などのテーマですけれども、冒頭にご提案のあった、どのような活動を盛り込むのかという具体のところについての話につきましても少し考えさせていただきまして、また皆様方にお知らせをさせていただきたいと思えます。

改めてですけれども、本日はちょっと時間をオーバーしまして申し訳ありませんが、大変すばらしいご意見を頂戴いたしましたこと、感謝を申し上げます。

それでは、司会へ戻させていただきます。ありがとうございました。

○司会

委員の皆様、ありがとうございました。

次回の懇話会でございますが、3月下旬の開催を予定しております。

それでは、以上をもちまして、第3回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。

了